

民謡への博物学的な「まなざし」

— フォノグラフの導入がハンガリーの民族誌研究の中で果たした役割について —

太田 峰 夫

序

ハンガリーの民謡研究者・作曲家バルトーク・B（ベーラ）（一八八一—一九四五）の農民観や民俗音楽観を考える際、世紀の変わり目から二〇世紀初頭にかけてのハンガリーの民族誌研究がどのような状況に置かれていたかを把握しておくことは重要だろう。というのも、彼やコダーイ・Z（ゾルターン）（一八八二—一九六七）の民謡研究は、先行する民族誌研究の諸成果を引き継ぐ形で、行なわれたものだからである。バルトークのブダペストにおける最後の職場がハンガリー民族誌博物館だったことが示唆するように、バルトークと制度的な学問としての民族誌研究との間には、実は密接な関係があったのだ。

そこで本稿では、世紀の変わり目のハンガリーの民族誌研究の状況について、とりわけシリンダー型の録音機械（通称「フオノグラフ」）に関わる諸問題を中心に論じたい。フォノグラフに注目するのは、バルトーク自身が強調するように⁽¹⁾、この録音機器の導入は、後に続く世代の民謡研究の方法論に決定的なインパクトをもたらしたと考えられるからである。そして一八九〇年代のハンガリーの研究者達が、フォノグラフの導入によって何を達成しようとしたのかを明らかにした上で、彼らのうちに、後のバルトーク達とも共通するような問題意識が認められるかどうかを本稿では考えることとする。

従来のバルトーク研究では、彼以前のハンガリーの民謡研究との連続性を論じたものはほとんどなかったと言つてよい。ただ、世紀の変わり目の時代の民謡研究や民族誌については、既にほかの角度からさまざまな研究がなされている⁽²⁾。音楽学研究の業績としては、シェベール・F（フェレンツ）のヴィカール・B（ベール）に関する最近のモノグラフィが重要だろう。

また、民族誌研究の制度化の問題や文化ナショナリズムとの関わりについては、社会史家のコーシャ・L（ラースロー）が既に包括的な研究を行なっている。民族誌研究者自身による歴史的回顧という意味では、フェイエーシュ・Z（ゾルターン）やカトナ・E（エディット）など、今日のハンガリー民族誌博物館のスタッフによる一連の仕事も見逃せない。こうした先行研究や、当時の文献から得られる知見を、バルトーク研究のこれまでの成果と結びつけることで、本稿では最終的には、当時の民族誌研究がどのような仕方、バルトークの民謡研究の方向性を条件づけていったのかを明らかにしたい。

本論は四つの部分から構成される。第一節ではまず、世紀の変わり目の時代、ハンガリーにおいてフォノグラフがどのように導入されたかを、一九〇〇年のパリにおける国際会議のエピソードを織りまぜながら振り返る。その上で、フォノグラフの導入を民族誌資料の収集の歴史の一コマとして捉え返し、このケースにおける問題点の所在を明らかにしよう。第二節では、ハンガリーの民族誌研究の歴史を振り返る。第三節では、フォノグラフ導入当時の状況について、当事者であるヴィカール・B（ベール）の学問上の問題意識に踏み込むかたちで論じ、フォノグラフによる民謡採集がどのような価値観を暗黙のうちに前提としていたかはつきりさせよう。そして第四節では、世紀の変わり目の民謡研究とバルトーク達のそれとの間に、どのような問題意識の上での連続性があつたかを確認することとする。

第一節

パリから話をはじめよう。

一九〇〇年九月、パリ市内のパレ・デ・コングレでは民間伝承 (traditions populaires) の国際学会が開催されていた。万国博覧会にあわせて開かれたこの学会では、フォノグラフの学問への活用法がさかんに議論された。特に反響を呼んだ研究発表の一つに、フランスの方言学者アズレーの発表がある。その内容については、ハンガリーの研究者シエベシュチェーン・G y (ジユラ) が翌年に発表した報告に詳しい。そこには、以下のようにある。

「会議で大成功を収めたのは、フォノグラフの使用に関するアズレーの発表だった。彼は機械の構造と録音の方法を紹介した後、フランスの方言研究の分野において、パリの人類学協会の支援によってどのような成果が達成されたか、詳細な報告を行なった。録音のために、この協会は特別のコレクションを設け、あらゆる収集上の観点を考慮に入れたカード・カタログを作成したとのであった。」⁽³⁾

フォノグラフは一八七七年にエジソンによって発明されたシリンドー式の録音機械である。改良が重ねられた結果、世紀の変わり目には研究目的にも使用できるようになっていた。シエベシュチェーンの報告は、フォノグラフで各地の音を録音・収集し、カタログのかたちで体系的にまとめあげる営みが、方言研究の分野ではじまりつつあった時代の様子をよく伝えている。ウィーソンの言語学研究所が一八九九年に世界中の言語の録音に着手したことは有名だが、この報告によれば、フランスにおいても、同様の動きはほぼ同時に始まっていたようである。

民謡の録音も始まっていた。同じ一九〇〇年のパリ万博に登場した川上音二郎一座の演奏をイギリスのグラモフォン社が行なっていること⁽⁴⁾ が示すように、西欧では、民間の会社によってさまざまな国の音楽の吹き込みが既に試みられていた。民族誌の専門家達もちろん、このような新しいメディアの活用法に無関心だったわけではなかったようである。前述の会議においても、アズレーは世界各地の民謡を会議の参加者達に聴かせている。シエベシュチェーンによれば、その内容は以下のよ

うなものだったという。

「パリ万国博覧会に際し、アズレー氏は特別なアイデアを思いついた。博覧会会場に集まった諸民族の歌も記録に残そうと考えたのである。発表者は音楽的な比較をするために、これらの国際的（“*henzéközi*”）な録音を使ってみせた。それで我々は中国、ヒンドウー、アラビア、ギリシヤ、セルビア、ロシア、ポーランドその他多くの民族集団の歌を聴くことができたのである。」⁽⁵⁾

アズレーによるフォノグラフの実演は、各国の参加者に強い印象を与えたようである。ただ、発表の途中、緊迫した場面もなかったわけではない。アズレーがマジヤル人の民謡を聴かせたとき、発表者とセツシヨンの議長、およびシエベシユチエーンとの間で議論のやりとりがあったようなのである。それについてハンガリーの学者は以下のように書いている。

「〔訳注：アズレーが紹介したマジヤル民謡の〕録音は良い部類のものではなかった。ただ、誰かがペーファイ〔訳注：十九世紀ハンガリーの詩人〕の良く知られた詩の一つをポーランドの旋律にのせて歌っているのが、私には理解できた。議長も同じことに気づいたようで、正当にもこう結論づけた、スラヴ諸民族に囲まれたマジヤル人の民俗音楽にはスラヴ人の影響が認められると。私はただちにアズレー氏の責任を追求した。すると彼は、ハンガリー・レストランの店員にだまされたと行って、弁解したのである。」⁽⁶⁾

数少ない録音をもとに、民族間の影響関係を論じることがどれだけ危ういことを、この部分是我々に教えてくれる。比較音楽学という学問分野がまだ揺籃期にあったことを、ここで我々は思い出しておくべきだろう。二十世紀前半を代表する民謡

コレクションとしてはベルリンのフォノグラム・アーカイヴが有名だが、ベルリンの比較音楽学者達が実際に録音作業を開始したのも、せいぜい一九〇〇年九月——偶然にもこの会議の直後——のことに過ぎないのだ。

とはいえ、アズレーはやはり迂闊だった。というのも、たまたまハンガリーに限っては、既に一八九六年からフォノグラフによる採集が行なわれていたからである⁽⁷⁾。これはヨーロッパでは、もつとも早いフォノグラフ導入の試みだった⁽⁸⁾。シェベシュチエーンがアズレーの録音の問題点を決然と指摘できたことの背景には、独自のデータの蓄積によつて培われた見識があつたのだ。

アズレーの発表と同じセッションでは、ハンガリーの研究者ヴィカール・B（ベーラ）の「ハンガリーの民謡のフォノグラフによる採集」と題された原稿も、フランス人の代読で読み上げられている。これについては、シェベシュチエーンの報告は以下の通りであつた。

「会議の出席者達は先ほどの「訳注：アズレーの発表がもたらした」興奮の後、以下のことを聞かされてまた驚かされた。すなわち、ハンガリー民族誌協会は既にフォノグラフによる採集を五年間「訳注：一八九六年以来」実践しており、ヴラシツチ・ハンガリー宗教及び公教育相の支援とハンガリー国立博物館の同意のもと、同博物館の民族誌課がヴィカール氏の二〇〇〇にも及ぶ録音から、既に豊富なコレクションを設立し、研究者達に利用可能な状態にしたということを彼らは聞いたのである。」⁽⁹⁾

二〇〇〇という数字はおおよそのものだろう⁽¹⁰⁾。ただ、一九〇〇年の時点で、ハンガリーの研究者達が相当数の自国の民謡を録音・収集していたことは、確かである。そのことは、彼らが万国博覧会のために、わざわざ三〇〇本の鑑管からなる民謡コレクションをパリまで運び込んでいた事実⁽¹¹⁾からも確かめられる。また、ヴィカール以外のハンガリーの研究者が、一

九〇〇年の時点においてフォノグラフによる民謡採集を開始していたことについても、我々は複数の情報源⁽¹²⁾から確認できるだろう。ハンガリーでは確かに、かなり早くからフォノグラフによる本格的な民謡採集が行なわれていたのだ。

*

しかしそれならば、いったいなぜ、ハンガリーの研究者達はこれほどまでに早くフォノグラフを入手し、大規模な収集活動に乗り出していたのだろうか。もちろん、「周縁」の国の研究者として、パリ万博に際し、新しいメディアの導入に積極的なところを対外的に誇示しなかった迷惑もあったのだろうか、それだけの理由で、わざわざ自国の民謡を数千曲も集めるとは考えにくい。背景にどのような問題意識があったのか、考えてみる価値はやはりあるだろう。

彼らにとって、民謡を収集することの意義はどこにあったのか。民族誌資料の収集が、しばしば収集する側の自己アイデンティティの形成と密接に関わることを、人類学者のクリフォードが述べていたのを思い出そう。「文化的なものであれ個人的なものであれ」、西洋近代のアイデンティティはしばしば「価値と意味の恣意的システムの下で所有財産を集めていく収集という行為」を前提とするというのが、彼の主張だった⁽¹³⁾。この主張が正しいとすれば、ハンガリーの民謡収集のケースにおいても、特定の「価値と意味の恣意的システム」のもとで、何らかの自己アイデンティティの構築が試みられていたのではないかという問いが、当然のように浮かび上がってくるはずである。実際の所は、どうだったのだろうか。

この問いに応えるには、フォノグラフの導入の背景にあたる部分を確保しておく必要がある。そこで次節ではまず、一八九〇年代のハンガリーの民族誌研究の歴史的・制度的な状況を整理しておくことにしよう。

第二節

ハンガリーの民族誌研究は口承文学の研究から始まった。そしてマジカル語の口承文学の採集がはじまったのは、十八世紀の終わりから十九世紀初めにかけてのことだった。最初期のものとして、例えばパーロツィーホルヴァート・A（アーダーム）（一七六〇—一八二〇）の手書きの歌謡集を我々はあげることができるだろう。採集が継続的に行なわれるようになったのは、ナポレオン戦争が終結し、いわゆる「ウィーン体制」が成立してからのことで、具体的には一八一七年以降のことである⁽¹⁴⁾。ヘルダーの造語（“*Volkslied*”）を参考に、「民謡」を意味するマジカル語の単語（“*népdal*”、“*nép*”は「民族」「人民」、*“dal”*は「歌」を意味する）が作られたのも、ほぼ同時期のことだった⁽¹⁵⁾。

十九世紀前半と言えば、ハンガリーではドイツ語に代わり、民衆語であるマジカル語を話す習慣が貴族階層の間で広まった時代である。民謡採集は明らかに、この言語ナショナリズムの土台を固める役目を帯びていた。文学者の団体である「キシュファルディ協会」（一八三六年設立）の主導のもと、ハンガリーでは十九世紀を通じて、数多くの民謡集が刊行されている。エルデーイ・J（ヤーノシュ）が編纂した『民謡と伝説』全三巻（一八四二年—一八四六年刊行）が出版されたほか、『ハンガリー民衆詩集成』（一八七二年—一九二四年刊行）シリーズの刊行も始まった。民謡の旋律についても研究が進み、マートライ・G（ガーボル）の『マジカル民謡総集成』（一八五二年刊行）、シーニ・K（カーロイ）の『マジカル民族の歌と旋律』（一八六五年刊行）などが出ている。キシュファルディ協会がかかわった楽譜としては、七巻からなるバルタルシュの大著『ハンガリー民謡』（一八七三年—一八九六年刊行）も重要だろう。

民謡の美的価値に注目する傾向が強かったことに加え、ドイツ語圏の「民俗学」（“*Volkkunde*”）と同様、研究対象が自民族であるマジカル人の文化に集中していたことが、初期のハンガリーの民族誌研究の特徴だった。自民族研究は、その後もハンガリー民族誌研究の主要な分野の一つとして、継続して行なわれていくこととなる。

民族誌研究が方法論上の大きな転機を迎えたのは、十九世紀後半のことである。制度的な学問としての民族学が台頭し、データの蓄積に基づく、実証主義的な研究が求められるようになったのだ。これ以降、ハンガリーにおいても、自然科学をモデルにした、正確なデータに基づく考察が支持されるようになっていく。ヘルマン・O（オットー）やバートキ・Zs（ジグモンド）、ヤンコー・J（ヤーノシュ）など、自然科学者としてキャリアをスタートした人々が、この学問分野において指導的な役割を果たすようになっていくのは偶然ではない⁵⁹。

また、一八六七年にオーストリア＝ハンガリー二重帝国が成立し、ハンガリーが条件付きながらも独立を勝ちえたことも、十九世紀後半の民族誌研究に決定的な影響を与えることとなった。この時を境に、ハンガリーの民族誌研究は、国家の支援を得た制度的な学問へと次第に変貌していったのである。

一八八九年にはハンガリー科学アカデミー公認の学術団体が作られる。「ハンガリー民族誌協会 (Magyar Néprajzi Társaság)」である。団体設立のタイミングは、決して早かったわけではない。既にこの時点において、ヨーロッパには同種の学術団体がいくつか存在していたからである⁶⁰。例えばフランスの「パリ民族誌協会 (Société d'Ethnographie de Paris)」(一八五九年創立)、ドイツの「人類学、民族学および先史学協会 (Gesellschaft für Anthropologie, Ethnologie und Urgeschichte)」(一八六九年創立)、イギリスの「フォークロア協会 (Folklore Society)」(一八七八年創立) などがそれにあたる。ハンガリーの団体の発足はオーストリア領チエコ「チエコスロヴァキア民族誌協会 (Národopisná spoločnosť československá)」(一八九三年創立)、オーストリア(「ウイーン民俗学協会 (Verein für Volkskunde in Wien)」(一八九四年創立)、オーストリア領ポーランド(「ポーランド民族学協会 (Polskie Towarzystwo Ludoznawcze)」(一八九五年創立))の類似団体の発足に比べると若干早い程度である。もちろん、この数年の差にあまり大きな意味はないだろう。大事なのは、フランス・ドイツ・イギリスなどの先行例に呼応する形で、十九世紀末にさまざまな国や地方で民族誌を研究する団体が生まれたということであり、ハンガリーの民族誌協会が、そうした「後続グループ」の一つだったという事実には他ならない。ハンガリー民族誌協会設立の時代背景には、ヨーロッパ各

国間における民族誌研究の制度化の競争があったのだ。

學術団体が国単位で作られるのに呼応するように、研究対象も多様化していった。ハンガリーにおいても、マジャル民族の文化だけではなく、当時のハンガリー領、すなわちオーストリア＝ハンガリー二重帝国の東半分に住む他のさまざまな民族集団の文化が、研究対象として考えられるようになっていく。研究の前例はそれ以前にもあったとはいえ、ハンガリーの民族誌協会が創立時にあえて「ハンガリー国内に住む全ての民族」を研究対象とすることを基本原則として謳ったことは、この意味において重要だろう⁽¹⁸⁾。それはさまざまな民族集団が隣接して暮らすこの地域の研究を、ブダペストの民族誌協会が一まとめに引き受けることを、宣言したにほぼ等しいからである。実際にもこの頃から、民族誌研究者の活動領域は、広大なハンガリー領の全域へと広がっていった。そしてハンガリーの民族誌研究は、当事者達の実際の意図はどうであれ、ハンガリー王国政府の領土的主張と密接に関わることとなっていったのである。

研究対象が他の民族集団へと広がった一方で、マジャル民族の利害を重視する自民族中心主義的なイデオロギーは十分批判されないまま温存された。そのことはやがて、ハンガリーの民族誌研究にある種のゆがみをもたらすことになる。コーシヤも指摘するように、社会進化論の影響から、一つの国家に複数の民族集団が居住する状況を「生存競争」と捉える考え方が流行し、マジャル民族の優越性を証明することが、研究上の課題と考えられるようになっていったのだ⁽¹⁹⁾。世紀の変わり目の時代、ハンガリーで学校教育などを通じて「マジャル化」政策が盛んに行なわれたことは有名だが、民族誌研究もまた、マジャル民族中心主義的なイデオロギーと無関係ではいらなかったのである。

*

一八九〇年代の民族誌研究の状況をよく示す事例の一つに、ブダペストで開催された建国千周年博覧会における「民族誌村」

展示がある。この時代の民族誌研究の方法論や問題点を正確に把握するために、以下においてこの展示について少し細かく見ておくことにしよう。

建国千周年博覧会は、一八九六年、「マジヤル人がカールパート盆地に定住してから千年がたったこと」を記念してハンガリー王国政府が大々的に行なったイベントの一つである。五月二日より十一月三日までの半年間、ペスト側のヴァーロシュリゲト公園の一部（五五〇、〇〇〇平方メートル）を使って開催されたこの博覧会（図1）では、最新の国内の物産の展示とともに、自国の歴史や民族誌に関する建物や器物が展示された。内外からの入場者数はのべ五八〇万人に達したという。これは同時代のパリやシカゴの万国博覧会の総入場者数には及ばない数字だが、一国の博覧会として、この建国千周年博覧会がかなり大規模なものだったことは間違いない⁽²⁰⁾。見どころは多かった。ヴェレシュマルティ広場から博覧会場場までの区間を運行した地下鉄はヨーロッパ大陸では最初のものであったし、特設パヴィリオンで試聴できた電話ニュース放送（テレフォン・ヒールモンドー）⁽²¹⁾も、ハンガリーにおいてのみ実用化されたメディアだっただけに、かなりの人々の注意をひいたはずである。

「民族誌村」展示もまた、人気のある企画の一つだった。この展示は、四七〇〇平方メートルの敷地に、ハンガリー各地の家屋二十四戸、教会、学校、チャールダ（ハンガリー風レストラン）、牧童小屋三戸、ロマの人々のテントを実物大で再現したもので、見物客は一軒一軒、民家を比較しながら村を見て回ることができた。同時代の資料から、敷地内の通りがそれぞれ「マジヤル通り」「ドイツ小路」「民族集団通り」と名付けられ、それぞれにマジヤル人、ドイツ人、その他の民族集団の民家が配置されていたことが分かる⁽²²⁾（図2、図3参照）。

伝統工芸や民家を紹介する試みは、それまでの博覧会にもあった。ハンガリーのケースに限っても、民家の展示の最初の例は一八七三年のウィーン万博までさかのぼることができるだろう⁽²³⁾。この時は四軒の農家が展示された。ブダペストにおける一八八五年の国内博覧会でも、十五の地方の民家の内部が展示されている。ただ、これらの先行例は、規模が小さく、展示

内容も各地の手工芸品の紹介という性格を帯びていた。それに対し、一八九六年の「民族誌村」展示は、収集活動の規模や展示スペース自体の大きさにおいても、学問的な厳密さにおいても、先行例をはるかに凌駕する企画だったのである。

展示の巨大化の背景には、一八九〇年代のヨーロッパにおける野外展示の流行があったと考えられる。有名なアルトゥール・ハゼリウスのスカンジナビア野外博物館（ストックホルム）の展示が始まったのは、一八九一年のことだった⁽²⁴⁾。同年に同じスウェーデンのルンド、一八九四年にはノルウェーのオスロでも民家を野外で展示する施設が作られている。そしてこれに呼応するように、オーストリア・ハンガリー二重帝国領内でもレンベルク（現在のウクライナ領リヴォフ）やプラハの博覧会（一八九五年）で民家の展示が行なわれていたことを、我々は建国千周年博覧会の報告書⁽²⁵⁾から確認できる。「民族誌村」展示はこうした流行を受けたものだったのだ。

目標の設定の仕方においても、ハンガリーの事例は「民衆生活の情景」⁽²⁶⁾を描くハゼリウスの試みと類似していた。すなわち、企画の実質的な責任者であったヤンコー・J（ヤーノシュ）の言葉を借りるならば、それは「民衆生活（népélet）の正確で忠実な再現」を目指すものだったのだ⁽²⁷⁾。各民家の内部には、それぞれの地方の民族衣装をつけた人形が配置された。人形は各地で採集した人類学的なデータをもとに製作されたもので⁽²⁸⁾、人種の科学としての人相学が盛んだった時代の人々の好奇心に訴えるものだったというが、ヤンコー達はこの人形を使って、丁度ハゼリウスのケースと同様に、村落の暮らしを描いた情景を作り、展示している⁽²⁹⁾。中には、ロマのテントのように、見物客の想像力をかきたてるような、極端な状況を描いたものもあった（図4）。当時刊行された写真集によれば、この情景は「風雨にさらされた小屋の前で年老いた父が鉄を鋸で打っている」一方で、「テントの中で、飢えと疲れに苦しむ母が赤ん坊に乳をやっている」状況を表現したものだといふ⁽³⁰⁾。

細部を記せばきりが無い。だが、一番重要なのはやはり、この展示がさまざまな民族集団が隣り合って暮らすハンガリー王国の姿を、一種の平和な箱庭として見物客の前に提示するものだったことだろう。企画者のヤンコーも、展示の趣旨が「ハン

ガリーの土地の諸民族の住まい（“magyar föld népeinek othlona”）を紹介することにあつたとした上で、「誰もが我が家にいるように感じた」ことこそが、展示が成功した理由だったとしている⁽³¹⁾。ヴィカールも千周年の年を振り返って、「民族誌研究は千年の歴史を持つネイション（“nemenz”）の目前に鏡を置き、それが新しい側面から自らを知るよう促した」と回想している⁽³²⁾が、彼の念頭に「民族誌村」展示があつたことは、この引用の直後に、この展示に言及し、評価していることからほぼ明らかである。「民族誌村」展示は、ネイション意識の形成と高揚にも深く寄与していたのだ。

展示のオーセンティシティを支えていたのは、民族誌研究の「科学的」な方法論だった。展示された二十四の家屋のうち、ちょうど半分の十二の家屋がマジヤル人の住居である点に、我々はヤンコー達の「科学性」へのこだわりを見て取ることもできる。当時の国勢調査では、マジヤル人はハンガリーの全人口（一五、一三三、四九四人）のうち四八％（七、三五六、八七四人）を占めていた。ヤンコー本人が明かすところによると、展示された家屋の半数がマジヤル人のものになっている理由は、実はこの四八％という数字にあると言うのだ⁽³³⁾。このような「客観的な」データを根拠にして、「民族誌村」展示は民族誌研究の「科学的」な世界観を、明確な仕方で表現していたのである。

もちろん、「科学的」であるが故のバイアスもあつた。現代の民族誌研究者カトナ・E（エディット）によると、この展示では展示する衣装を選択する際、市民の服装とははつきり異なるような、装飾的な民族衣装が優先的に選ばれていたという⁽³⁴⁾。既に使用されなくなった古い家具類が復元され、展示されるケースもあつたらしい⁽³⁵⁾。「伝統」に即した例を見せようという考えがあつたのかもしれないが、結果的には、展示内容から現実のハンガリーの市民社会との関わりを思い起こさせる要素が除外されていたのである。企画者の意図はどうあれ、この展示は村落の文化をいわば「他者」の文化として眺めることを、観客達に教えるものだったのだ。

社会学者の吉見俊哉は、万国博覧会の時代が、ヨーロッパの諸国家が事物を体系的に分類し把握する近代の「博物学的なまなざし」の場を、「新しい資本主義のイデオロギー装置としてみずから演出している」としたときに到来したことを述べて

いる³⁶。例えば一八九五年のシカゴ万国博覧会における民族学的「実物」展示が、社会進化論的な世界観に基づくその構成ゆえに、白人の見物客にとって「心地よい自己確認の場」であつたことを彼は指摘していた³⁷。展示内容が異なる分、性急な一般化は避ける必要があるが、あるいは一八九六年のブダペストの「民族誌村」展示もまた、マジヤル人の市民階級の人々にとつての「自己確認の場」として、「博物学的なまなざし」の場の演出の一翼を担っていたと考えられるかもしれない。各地方の民家は、互いに比較しやすいように陳列されていた。見物に訪れた市民達が、それらの民家をいわば「他者」の文化として、距離を取ったところから眺められるように、展示物が選択されていたことを、我々は思い出しておく必要があるだろう。同時代の資料もまた、「民族誌村」展示がそのような場として機能していたことを示唆している。例えば一八九七年に出版されたカタログ『千周年博覧会の建築』には、「民族誌村」展示に関して以下のように書かれている。

「たぶん家屋ほど人種の特徴を、彼らの考え方や生活の仕方、経済的状況や信心深さ、教養を示すものはないだろう。豊かさや貧しさ、前者と関連する秩序を愛する心や趣きに対する感覚、後者の帰結である不潔さは、建物の外観や間取りの仕方、材質、屋根の付け方、そして装飾と装飾文様それ自体の特徴の中に、すべて表現されることとなる。」³⁸

このように述べた上で、カタログの著者は個々の家屋を比較し、それらがいかにかにその地方なり民族集団の「豊かさ」の程度を表現しているかを論じている。例えばベレグ県のルテナア人の家は木の床がなく、屋根は葦葺きで、「この貧しい、つましい暮らしを営む民族の特徴を示す」ものだとは彼は書く。一方、ヴァシシュ県のヴェンド人の家は、「ヴェンド人の勤勉さや実際のものの考え方」を示すものとして位置づけられる³⁹。家屋を見て回ること、一つ一つの地方の農村の暮らしを博物学的な枠組みの中で把握し、相互に関係づけられるようにこの展示がつくられていたことを、少なくともこの資料は示唆していると言えるだろう。

こうした枠組みの中で、展示する側に、マジヤル人の民家をほかの民族集団のそれよりも立派に見せようとする意図が、どれほどあったかは分からない。ただ、ヤンコーがマジヤル人の民家に関してのみ、「全ての大きな、特徴のあるグループ」を紹介しようとしていたことは、確かである⁽⁴⁰⁾。また、同じ報告書の中で、民家の様式的特徴のどの部分が「外来」のもので何が「マジヤルの」な特徴なのかを彼が論じていることや、「形態発展」の観点から見ても、いかにマジヤル人の民家が発達した様式の特徴を帯びているかを論じていることなどから、ヤンコーにとつて、マジヤル人の文化アイデンティティとその相対的な優越性を示すことは、かなり重要な関心事だったことが分かる⁽⁴¹⁾。他の民族集団の文化に一応の配慮をしながらも、やはりヤンコーはその一方で——意識的にであれ無意識的にであれ——マジヤル人の文化アイデンティティの問題に取り組んでいたのである。「民族誌村」展示は、一方においてハンガリー王国全土にわたる調査の結果を反映させつつ、他方においてマジヤル民族の独自性と優越性を主張するという、当時の民族誌研究が持っていた問題意識の二面性を、一般の人びとに分かりやすい形で伝えるものだったのだ。

*

「民族誌村」の事例が示唆するように、一八九〇年代のハンガリーの民族誌研究者の多くは、データの「体系」性を重視し、自国の領土を網羅的に調べる傾向にあった。この傾向は、一八九三年に民族誌博物館設立が正式に決まると、更に強まることになる。制度上は国立博物館に属しつつも、「民族誌課」が「民族誌博物館」として独自の展示を開始するのは、五年後の一八九八年のことであった。

このような前後関係をふまえるならば、「民族誌村」展示のような一回きりのイベントが、ヤンコー達にとって、将来の民族誌博物館のコレクションを充実させるための貴重な収集の機会だったことが分かるだろう。実際にも、交渉の結果、「民族

誌課」は約二一〇〇〇点の博覧会の展示物を新たに自らのコレクションにしている⁽⁴²⁾。一八九三年の時点では約五六〇〇点の所蔵品しか「民族誌課」になかったことを考慮すれば、この時期の民族誌資料の収集がいかに速いペースで行なわれていたかは、容易に想像がつくだろう。

しかも、単に量が増えただけではない。民族誌博物館の現館長であるフェイエーシュ・Z（ゾルターン）によれば、そもそもマジャル民族に関わる資料と、そのほかの民族集団に関わる資料を、同じ博物館の中で管理する構想自体、このヤンコーの代によくやく固まったものだといえる⁽⁴³⁾。このことは、ハンガリーの専門家にとって、何が「民族誌資料」で、何がそうでないかというコンセンサスが、よくやくこの時期に出来上がったことを示唆している。一八七三年のウィーン万博で展示されたハンガリーの手工芸品が、実際には民族誌研究者によって採集されたものであったにもかかわらず、ブダペストの応用美術館の所蔵品になったこと⁽⁴⁴⁾を考えれば、状況の変化は分かりやすい。一八九六年の千周年博覧会では、ハンガリー領内の農村の大量の器物が「民族誌資料」と見なされ、民族誌博物館に送り込まれている。クリフォードに立ち返って言うならば、民族誌資料の収集が前提とするような「価値と意味の恣意的システム」は、ハンガリーにおいてはまさにこの時代に、制度的な実質を伴ったものとして機能し始めたと、我々は主張できるはずである。まさにこの時から、民族誌資料の収集は、多民族国家でありながらマジャル民族を中心とする、ハンガリー王国の独特な自己アイデンティティの構築に寄与することとなったのだ。

第三節

世紀の変わり目の時代の民族誌研究において、収集された資料の量だけではなく、関連のデータの正確さや、収集の体系的性が重視されていたことを我々は見た。このことからすれば、ハンガリーの研究者達がフォノグラフにいち早く注目した理由

は、明らかだろう。それは大量の旋律を迅速に収集し、データとして保存するのに、非常に適した道具だったのである。

ハンガリーの研究者達はかなり早い時期から、フォノグラフのもたらす情報の客観性や正確さに注目していた。一八九〇年に出された、ハンガリー民族誌協会の機関誌の創刊号においても、我々はヘルマン・A（アンタル）の以下のような意見を讀むことができる。

「もし民族誌一般が本当に正確な学問になることを望むならば、技術の最新の成果を利用しなくてはならない。丁度民族誌の研究対象を写真で固定化するように、民衆言語や民俗音楽の音をフォノグラフのような装置で録ることができるようにになれば、方言学（“*dialektologia*”）や、民衆言語の諸伝統の研究一般は、ようやく真に確實で客観的な土台の上に立つことができるはずである。」^{（45）}

一八九〇年と言えば、まだフュークスの民謡録音もまだヨーロッパに紹介されていなかった時期のことだが、ヘルマンは既にこの段階で、フォノグラフの持つ可能性を論じている。そこにおいて彼が、写真とのアナロジーに言及していることは重要だろう。もともとハンガリーの研究者達は、写真の導入に積極的だったからである。例えばヤンコーは、「（写真は）人類学上の諸類型や道具類の使い方、さらには諸民族の生活を自然のままの姿で紹介してくれる」と述べ^{（46）}、一八九四年には「民族誌課」独自の写真アーカイヴを設立している。ヤンコーの人体写真のシリーズは、一九〇〇年のパリ万国博覧会の人類学及び考古学に関する国際学会でも——冒頭で言及した民間伝承の国際学会とは別の学会だが——高い評価を得るほどのものだったらしい^{（47）}。自国の住民の生活の「自然のままの姿」を最新の技術を使って記録することで、当時のハンガリーの民族誌研究者は自身の国際的な評価を高めていた。フォノグラフ導入は、こうした流れの中の出来事だったのだ。

フォノグラフ導入を実際に主導したヴィカールもまた、データの正確さをことのほか重視した研究者だった。彼が当代きつ

ての速記術の名人だったことは、このことと無関係ではないだろう。フォノグラフ導入当時、彼はハンガリー国会の「速記監事 (gyorsíró-vezető)」だった。その仕事の内容は、部下とともに国会の審議を記録し、自分の記録をもとに部下の記録をチェックするものだったという⁽⁴⁸⁾。信頼性の高い技量がなければ務まらないことは明らかだが、当時ヴィカールはまさにこの仕事をこなしていたのだ。

当時、フォノグラフに先立つかたちで、速記術は民族誌研究に応用されつつあった。速記術の効用について、ヴィカールは一八九一年の論文において、以下のように述べている。

「民族学、そしてとりわけ言語学の観点から、以下のことを重要な事実として書いておかねばなるまい。民話の記録においても伝説の記録においても、この種の民衆言語の伝統は多かれ少なかれ洗練され、様式化され、露骨さを取り除かれたかたちで採集者の手によって発表されてきたが、そうしたこれまでのやり方に対し、私は厳格に口頭の上演にしたがった、ということ。もちろん、これは速記術によってのみ達成可能なことである。」⁽⁴⁹⁾

このように記した上で、採集されたデータが、具体的には言語学、とりわけ統語法の研究に新しい成果をもたらす可能性を彼は指摘している。フォノグラフを導入する以前から、既に彼が個々の実演の記録に強い関心を持っていたことを、我々はこうした発言に読み取ることができるだろう。もちろん、速記術は膨大なデータの収集も可能にした。本人の報告によると、例えば一八九〇年の五週間にわたるシヨモギ県への採集旅行で、彼は一〇〇を超える民話と、それを超える数の民話とバラッド、二〇〇ものなぞなぞを採集したという⁽⁵⁰⁾。つまり、大量の民謡を正確かつ迅速に収集することを、彼はフォノグラフ導入以前から、実践していたのである。旋律の記録が可能になった点において、フォノグラフの導入がヴィカールの民謡採集の方法論に変化をもたらしたことは明らかだが、少なくとも本人の問題意識からすれば、録音機械の導入はそれまでの活動の延長戦

上にあつたのだ。實際、フォノグラフ導入以降も、ヴィカールが旋律の録音を行うかたわら、速記術を使って歌詞も精力的に記録していることに、我々は注意しておかなくてはなるまい⁽⁵¹⁾。

ヴィカールは職業音楽家に採集を手伝わせなかったが、その理由が費用の問題だけにあつたわけではないことは、以上の事情からも明らかだろう。「音楽家達は性格上、民間伝承の完全に忠実な記録を期待できるような種類の人々ではない」というのが彼の持論だつたのだ⁽⁵²⁾。丁度人間や事物の図像を「藝術家の個人的な見解」よりも、写真の方が忠実に再現するのと同じように、民謡の採集においても、「音楽家の幾分正確な再現」に頼るよりはフォノグラフを使うべきだと彼は書いている⁽⁵³⁾。彼もまた、写真とフォノグラフの間に一種のアナロジーを見ていたのである。

音を正確に記録・保存するメディアを駆使して、ヴィカールはハンガリーの領土全体をくまなく調査しようとした。この点については、ハンガリーの領土全体を調査しようとする、当時の民族誌研究の全体的な傾向との関連性を我々は指摘できるだろう。民謡採集の体系性をヴィカールが重視していたことは、例えば一八九六年の『エトウノグラフィア』誌上の論文における、以下の箇所からも確認できる。

「我が国のさまざまな民衆詩に関するコレクションに共通した、ひとつの根本的な問題点から出発することにしよう。短く言い表すならば、それは分散性、体系性のなさとも呼べるものである。我が国には民間伝承の採集を全国にまで広げた人物なり、団体なりがこれまでいなかった。時間がかかるにせよ、同じグループに属する民衆詩が互いに隣接して見出せるような包括的なコレクションを実現させた者がこれまではいなかったのである。」⁽⁵⁴⁾

つまり、「全国」の伝承が「体系的」に調査されてこなかったことが問題だというのだ。ヴィカールは同じ論文において、ハンガリーの民衆詩の「体系的な分類」と「批判的なコレクションの出版」の必要性をあらためて訴えている⁽⁵⁵⁾。そもそも

歌詞と旋律のうち、歌詞しか記録が残っていないこと自体、彼にとつては「体系的ではない収集を行なった結果」に他ならなかった⁽⁵⁶⁾。また、バルタルシュのように、旋律と歌詞の両方を記録した例についても、限られた地方でしか採集を行なわなかったことを、彼は批判している。コレクションを体系的なものとするためには、ハンガリー全土において、民謡の歌詞と旋律の両方を記録することが必要だというのが、彼の立場だったのである⁽⁵⁷⁾。

ヴィカールがフォノグラフを使い始めるのは、『エトウノグラフィア』に論文を発表した直後の一八九六年十二月のことだった。彼はフォノグラフを、系統だったデータの収集に欠かせないツールとして捉えていた。そのことを、我々は例えば一九〇〇年の彼の講演原稿からも確認できる。そこには以下のようにある。

「国内に見出せる資料の機械的な収集、そして手をつけないままでの資料の首都への輸送。これこそフォノグラフがもっともうまくこなすことのできる課題なのである。」⁽⁵⁸⁾

ここでヴィカールが鑑管を「首都」にそのまま輸送する構想を述べているのは重要だろう。情報を一つの場所に集め、体系的に扱う発想が、そこに現れているからである。

さて、ヴィカールのケースにおいて興味深いのは、彼個人の問題意識に国が迅速に応えた点である。そもそも民族誌協会が一八九六年にフォノグラフを購入できたのも、宗教及び公教育省（以下、公教育省と略記する）の助成金があったからにほかならない⁽⁵⁹⁾。一八九八年には、公教育省の承認のもと、ヴィカールと民族誌博物館の間に交渉が成立し、前者が録音した民謡を、民族誌博物館が鑑管ごと買い取る仕組みが出来上がっている。現代の音楽学者マーク・カツツは録音技術がもたらした可能性の一つとして「サウンド」の「輸送可能性（“portability”）」⁽⁶⁰⁾をあげるが、まさにこの「輸送可能性」を、研究のために活用する制度的な枠組みが、この国では十九世紀末の時点で築き上げられていたのだ。農村の音楽はこうして、ハンガリ

ーの文化アイデンティティに関わる民族誌資料として、他の器物と同様に収集・保存されることとなったのである。

いったんフォノグラフを収集・保存する仕組みが出来てしまえば、職業音楽家に頼むべき仕事は録音の採譜のみとなる。民族誌博物館が雇ったのは、ケレスティ・I（イシュトヴァーン）という音楽評論家ただ一人だった。彼の助力によって、ヴィカールは「タームラップ」（“támlap”）と呼ばれる記録カードを作成する。これは表が歌詞とデータ、裏が楽譜からなるカードで、曲ごとに作られていた。一つ一つの民謡に関して、一定のフォーマットにしたがった、一揃いの情報を読み手に提供するこの「タームラップ」は、複数の民謡を比較したり、大きな体系に位置づけて論じたりすることを容易にした。そしてフォノグラフと「タームラップ」の組み合わせが、民謡という目に見えないものを、あたかも目に見えるもののように、繰り返し比較したり吟味したりすることを、可能にしたのである。少なくともハンガリーのケースでは、フォノグラフの導入は民謡という対象の見え方それ自体を変えてしまった面があったことを、我々は注意しておく必要があるだろう。

このフォノグラフと「タームラップ」を駆使して、ヴィカールは民謡のヴァリアントの研究をすすめていった。録音機器の導入は、彼の実証主義的な方法論にも更なる変化をもたらすこととなる。フォノグラフによって、複数の互いに類似した演奏に関して、一回だけの聴取体験では気付かないような相違点があることに、気付いたためである。この点について、彼は一九〇一年に以下のように書いている。

「採集の過程で私が気付いたのは、資料が膨大である以上、民間伝承については人は完全に記憶に頼ることはできない、ということである。それで覚えている歌詞や既に知られた旋律を、またあらためて聴いたと私が思っても、フォノグラフが、最初知っているように感じた歌詞や旋律が、実はそれらを新しいヴァージョンたらしめるような、重要な部分を含むのを疑いようもなく示すことが、数えきれないくらいあった。こうした経験から、私はどんな場合でも、歌詞と旋律のどちらも最後まで聴くようになった。というのもしばしば、まさに最後の部分が驚きをもたらすことがあり、そこに新しいヴァージョンの形成

の、明白な兆候が現れることがあるからである。」⁽⁶¹⁾

相違点だけではない。この引用に続けて、当初気付かなかった類似性に、フォノグラフを聴き返すうちに気付いた例も、彼は紹介している。丁度視覚体験におけるように、聴覚体験においても、録音機器さえあれば、二つの対象を実証的な仕方と比較することができることに、ヴィカールは早い時期に気付いていたようなのである。

フォノグラフ導入後の最初の数年のうちに、彼はマジャル民謡にも、丁度言語の「方言」に対応するかたちで「音楽方言」があることを明らかにした⁽⁶²⁾。冒頭でふれた一九〇〇年のパリ万国博覧会でも、彼は二十六のヴァリアントからなる「音楽方言」の地図を作成し、一般に公開している⁽⁶³⁾。対象がマジャル人の音楽に限定されていたとはいえ、各地方で採集されたヴァリアントを互いに比較可能なものとして提示した点において、この地図が「民族誌村」展示の音楽版とも言うべき性格を帯びていたことは重要だろう。

マジャル民族の音楽文化が多様な「方言」を含みつつ、全体としては一つの大きなまとまりを形成していることを外国の人々に示した点で、この地図の作成は決定的な意義を持っていた。本稿の第一節でふれた、一九〇〇年の国際会議でのやりとりを思い出せば、この点は理解しやすいはずである。「スラヴ諸民族に囲まれたマジャル人の民俗音楽にはスラヴ人の影響が認められる」などといった議論に反駁する必要がある、ハンガリーの研究者には常にあったのだ。新しいメディアの登場によって、民謡の比較・分類が容易になったことは、こうした反駁も容易にしただろう。その意味では、「音楽方言」の地図の作成は、「科学的」な知見に基礎を置く、新たな音楽のナショナリズムの到来を予告するものだったとも言えるかもしれない。

以上の議論から、世紀の変わり目のハンガリーにおいて、フォノグラフによる民謡採集がさかに行なわれたことの理由はほぼ明らかだろう。いささか奇妙な言い回しをするならば、ハンガリーの研究者達はフォノグラフの導入によって、民謡を博物学的に捉える「まなざし」を発見したのだ。そしてこの「まなざし」を自分のものとすることによって、マジャル人の文化

アイデンティティを音楽の面から「科学的」に主張できることに彼らは気付き、実際にそれを試みたのである。

第四節

一九〇〇年以降、各国の研究機関はそれぞれに自国のフォノグラフのコレクションを充実させていった。一九〇一年にヤン・コーは、「ハンガリー国立博物館のコレクションは今後、全ヨーロッパの模範となることであろう」⁽⁶⁴⁾と誇らしげに述べているが、実際には、ドイツのベルリン・フォノグラム・アーカイヴのような「中心」の国々のコレクションが、やがて各国の民謡収集のあり方により大きな影響を与えるようになっていく。データ整理の遅れに加え、録音資料を複製する技術の開発で決定的に遅れをとったこと⁽⁶⁵⁾が、ハンガリーの事例が徐々に影響力を失っていった背景にはおそらくあったと考えられる。

民謡研究の歴史の流れから見れば、ヴィカール達の試みは単なるエピソードに過ぎなかったとも言える。ただ、彼らのフォノグラフ導入の試みは、後のハンガリーの音楽史に思わぬ展開をもたらしたことを、我々は見落としてはならないだろう。録音された民謡を体系的に分類・分析する「科学的」な方法論を、モダニストの作曲家であるバルトークやコダーイが、やがて引き継いでいったのである。

コダーイがはじめてヴィカールのもとを訪れたのは、一九〇三年のことだった。民族誌博物館のフォノグラフを使って彼は博士論文を書き、一九〇五年には民族誌協会に入会する。翌年にはバルトークも協会の会員になっている⁽⁶⁶⁾。彼らはヴィカールから直接、民族誌研究の実証主義的な方法論を学んでいた。そして民族誌研究の「科学」性はやがて、マジヤル民謡に関する彼ら自身の議論の主たるよりどころとなっていくのである。後に自分達の収集したマジヤル民謡のオーセンティシティが問題になった時、バルトークが「これは感情の問題ではなく、科学の問題である」と述べていることも、こうした事情を端的に物語っている⁽⁶⁷⁾。バルトーク達の立場とロマン派の「国民楽派」のそれとの大きな違いは、まさにこのような点にあっ

たのだ。

バルトークがヴィカールのコレクションにどれだけ多くを負っていたかは、彼の主著『マジャル民謡』からも明らかだろう。この著作で、バルトークはヴィカールが採集した一四九二曲の民謡を、基礎資料の一つとしている。一四九二曲という数は、バルトーク本人の集めた曲数(二七二曲)、コダーイが採集した曲数(約二七〇〇曲)について三番目に多い数字である⁽⁶⁸⁾。通例バルトークが発見したとされる「古い様式の農民音楽の様式」の譜例を作る際も、彼はヴィカールの採集した民謡の録音から幾つも例をひいている⁽⁶⁹⁾。個々の演奏に見られるヴァリアントの問題や、「音楽方言」の問題など、ヴィカールが最初に着目したトピックも、バルトークは旋律の面からさらに掘り下げて論じている⁽⁷⁰⁾。さらに、バルトーク達はマジャル民謡との比較を行なうために、ルーミア人やスロヴァキア人など、ハンガリー領内の他の民族集団の民謡を採集しているが、これも既にヴィカールが試みたことだったことも、付け加えておかねばなるまい⁽⁷¹⁾。

もちろん、民族誌研究者と職業音楽家とは着眼点は異なっていただろう。ヴィカールが歌詞に関心を持っていたのに対し、バルトーク達がむしろ音楽的な観点を問題にしたことは、重要な相違である。しかしながら、民謡を見る際の対象との距離の取り方や博物学的な発想に関して、両者の間にある種の連続性があったことに変わりはない。例えば、ヴィカールが民謡のコレクションについて、「同じグループに属するものが互いに隣接して見出せる」かたちで出版されなくてはならないと述べていたのに対し、バルトークもまた、民謡の分類にイルマリ・クローンの民謡の分類法を採用した際、その利点として「一つの類型を示す諸旋律が、僅かな例外を除き、互いに近くに来る」ことをあげている⁽⁷²⁾。民謡研究を続けていく中で、作曲家達もまた、民謡を系統的に捉える博物学的な「まなざし」を内面化していったことを、こうした箇所は確かに示唆していると言えるだろう。このように、バルトーク達の民謡観は、世紀の変わり目の民族誌研究の世界観を暗黙のうちに前提とするものだったのである。

結び

以上で我々は、世紀の変わり目の時代のハンガリーの民族誌研究が、マジカル人の文化アイデンティティを実証主義的に解明する学問として、制度的な土台を築きつつあったことを見た。フォノグラフはこうした状況の中で、当時の研究者達の文化アイデンティティに関わる問題意識に応える音響メディアとして導入されたのである。

ヴィカールの世代の民謡研究の方法論と問題意識は、やがてバルトーク達の民謡研究の方向性にも、大きな影響をもたらすこととなる。もちろん、民謡の美的な価値づけの問題については、「民族藝術」の流行をはじめ、藝術をめぐるほかのさまざまな思潮が彼らに影響を与えた可能性はある。ただ、民謡を系統的に捉える知的な認識の枠組みについては、バルトーク達が制度的な学問としての民族誌研究に非常に多くのことを負っていたことは、以上の議論からも確かだろう。

世紀の変わり目の民族誌研究とバルトークの民謡研究との間の連続性が明らかになったことによって、次の課題として、後者と政治的なイデオロギーとの関係の問題が浮かび上がってくる。しかしながら、これは本稿の課題を超える問題なので、それについてはまた別な機会⁽⁷⁾に論ずることとしたい。

註

- (1) 例えば一九三五年の講演「どのようにして、そしていかに民族音楽を採集するか」において、バルトークは以下のように述べている。「最初の収集家達は、もし彼らが望んだとしても、科学的な観点から見て満足いく成果を達成することができなかった。というのもまさに重要な機器を、フォノグラフを持っていなかったからである。今日の収集家達はさまざまな種類の計測機器・録音機器を持って仕事をこなす。それは個々の旋律の、言わば『瞬間写真（"pillanatképek"）』について、可能な限り正確な姿を描くためである。」(Cf. *Bartók Béla írásai* 3 (Budapest: Editio Musica, 1999), edited by V. Lampert, p. 276.)

- (2) Sebő, Ferenc, *Tikár Béla Népzenei Gyűjteménye* (Budapest: Hagyományok Háza, 2006); Kosa, László, *A magyar néprajz tudománytörténete* (Budapest: Osiris, 1989; 2nd edition, 2001); Fejős, Zoltán, *A néprajzi múzeum gyűjteményei* (Budapest: Néprajzi Múzeum, 2000).
- (3) Sebestyén, Gyula, “A párisi folklorista kongresszus”, *Ethnographia* (1901), no. 6, p. 251.
- (4) この時の録音はCD化されている。『魅えるオペレーター 一九〇〇年パリ万博の川上一座』（東京：東芝EMI、一九九七年）を参照せよ。
- (5) Sebestyén, *op. cit.*, p. 251.
- (6) Sebestyén, *op. cit.*, p. 251.
- (7) 同時代の資料はどれもヴィカールが一八九六年十二月にフォノグラフを使い始めたことを示唆している。シェーバーが指摘するように、後世言われるようになった、一八九五年説は誤りである（Cf. Sebő, Ferenc, *Tikár Béla népzenei gyűjteménye* (Budapest: Hagyományok Háza, 2006), p. 25-27）。ユダーイは一九五九年の回想文「ヴィカール・ベーラの思い出」において（一八九六年五月から十一月にかけて開催された）「民族誌村」でフォノグラフのコレクションが展示されているのを見たと言っているが、この回想の記述は不正確なものと考えられる（Cf. Kodály, *Élvezetekintés* 2 (Budapest: Zeneműkiadó, 1982), p. 403.)。
- (8) アメリカ合衆国では人類学者 J・W・フュークスが一九九〇年に先住民の民謡の録音を行なっている。
- (9) Sebestyén, *op. cit.*, p. 252.
- (10) 国立博物館民族誌課の責任者ヤンコー・J（ヤーンシユ）は一九〇一年の報告書に「ヴィカール・ベーラの採集によって、既に一五〇〇の録音が五〇〇本のシリンドラーにおさめられている」と書いている（Cf. Sebő, Ferenc, *Tikár Béla népzenei gyűjteménye* (Budapest: Hagyományok Háza, 2006), p. 162）。二〇〇〇と一五〇〇では数が大きく食い違う。おそらく、国立博物館の所有物だったシリンドラーのほかに、（将来購入予定であるにせよ）書類上はまだヴィカールの所有物となっていたシリンドラーもあったため、シェーバシユチエーン達はおおよその数字を想定せざるを得なかったのだと考えられる。
- (11) Sebő, *op. cit.*, p. 159 and p. 162.
- (12) Cf. Sebestyén, Gyula, “A párisi folklorista kongresszus”, *Ethnographia* (1901), no. 6, p. 249-258; Sebő, *op. cit.*, p. 161-162; Sebő, *op. cit.*, p. 227-231.
- (13) ジェイムス・クリフォード（太田好信、慶田勝彦、清水展、浜本満、古谷嘉章、星埜守之訳）、「芸術と文化の収集について」、『文化の窮状』（京都：人文書院、二〇〇三年）、二七六頁。
- (14) Kosa, *A magyar néprajz tudománytörténete* (Budapest: Osiris, 1989; 2nd edition, 2001), p. 40.
- (15) Kosa, *op. cit.*, p. 40.

- (16) Kósa, *op. cit.*, p. 71.
- (17) Kósa, *op. cit.*, p. 104.
- (18) Kósa, *op. cit.*, pp. 104-105, and 108.
- (19) Kósa, *op. cit.*, p. 72.
- (20) 日本の例と比べるとその規模は分かりやすい。ハンガリーの博覧会はその前年（一八九五年）に京都の岡崎で行なわれた第四回内国勸業博覧会（会場面積約一六八、三〇〇平方メートル、入場者数一、一三七、〇〇〇人、開催期間四ヶ月）に比べると数倍大掛かりなもので、一九〇三年に大阪の天王寺で開催された第五回内国勸業博覧会（会場面積約三六四、五〇〇平方メートル、入場者数四、三五一、〇〇〇人、開催期間五ヶ月）と比較しても同程度、ないしそれよりやや大規模な博覧会だった。日本の博覧会については、下記を参照せよ。吉見俊哉、『万国博覧会の政治学』、一二七頁。
- (21) 電話ニュース放送は一八九二年にブダペストで実用化された。当時の報道によれば、この「電気仕掛けの有益な奇跡」（＝テレフォン・ヒールモンドー）によって「ハンガリーは全世界に先んじた」とある（Cf. *Budapest: Világviszros* (Budapest: Helikon Kiadó, 1996), p. 165.）。なお、テレフォン・ヒールモンドーの詳細については下記を参照せよ。吉見俊哉、『「声」の資本主義』（東京講談社、一九九五年）、一三一一一八頁。
- (22) Baint, Zoltan, *Az Ezeréves Kiállítás Architektúrája* (Bécs, Schroll Antal és Tsa., 1897), p. 38.
- (23) Kresz, Mária, “A magyar népművészet felfedezése”, *Ethnographia* (1968), no. 1, p. 4.
- (24) ハゼリウスの展示については、以下の文献を参照せよ。Alexander, Edward P., “Arthur Hazelius and Skansen: The Open Air Museum”, *Museum Masters. Their Museums, and Their Influences* (Nashville, Tenn.: American Association for State and Local History, 1983), pp. 239-275. See also Kirshenblatt-Gimblett, Barbara, “Objects of Ethnography”, *Exhibiting Cultures: The Poetics and Politics of Museum Display* (Washington and London: Smithsonian Institution Press), edited by Ivan Karp and Steven D. Lavine, p. 401.
- (25) Jankó, János, “Néprajz-Bevezetés”, *Magyarország közgazdasági és közművelődési állapota ezeréves fenállásakor és az 1896. évi ezredéves kiállítás eredménye* vol. V (Budapest: Pesti Könyvnyomda-Részvény-Társaság, 1898), edited by Sándor Mattekoviis, p. 824.
- (26) Kirshenblatt-Gimblett, *op. cit.*, p. 401.
- (27) Jankó, *op. cit.*, p. 818. なお、ハゼリウス本人が、この「民族誌村」展示を見にブダペストを訪れていることが、下記に付言しておく。Cf. Alexander, *Museum Masters, Their Museums, and Their Influences*, p. 248.
- (28) Fejős, *op. cit.*, p. 201.

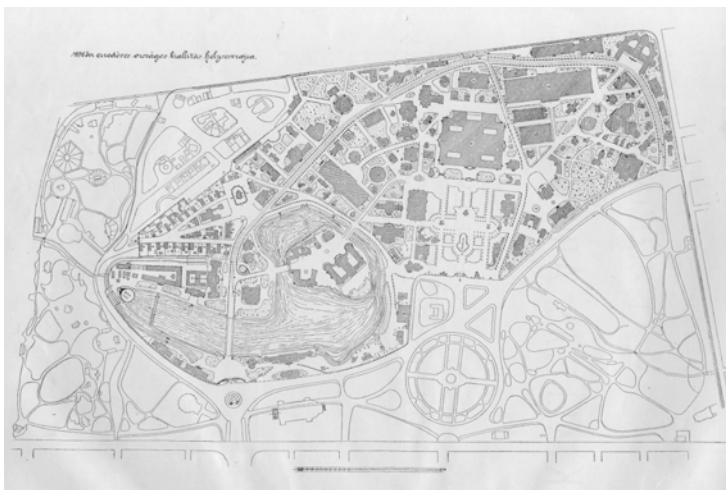
- (29) さまざまな地方の衣装を展示するために、ヤンコー達はふさわしい状況を自分達で考え出さざるを得なかった。現代の民族誌研究者カトナ・E (エディット) によると、例えばマチョー地方の衣装とボルシード地方の衣装を展示するために、ヤンコーは以下のような場面を考え出したという。「この(訳注: マチョー地方の)『人物』は、まだ軍隊でシラーキ・ヨージ(訳注: マジヤル語では「シラーク出身のヨージェフ」という意味にとれる)と一緒に黒パンをかじっていた時分、この良き戦友を客として家に招いた。今その戦友が妹と一緒にやってきたところ、二人とも大いに着飾っている。」Cf. Fejős, *op. cit.*, p. 200-201.
- (30) Laurencic, Gyula, *Az ezeréves Magyarország és a millenniumi kiállítás* (Budapest: Kunosy Vilmos és fia nyomdai műintézete, 1896), p. 24.
- (31) Matlekovits, *op. cit.*, p. 817.
- (32) Sebő, *op. cit.*, p. 219.
- (33) Jankó, “Néprajz-Bevezetés”, *Magyarország közgazdasági és közművelődési állapota ezeréves fenállaskor és az 1896. évi ezredéves kiállítás eredménye* vol. V (Budapest: Pesti Könyvnyomda-Részvény-Társaság, 1898), edited by Sándor Matlekovits, p. 826.
- (34) カトナ・E (エディット) によると、例えばニトラ県ドイツ系住民(「クリッカーホイアー」)の民家に関して、ヤンコーは博覧会の翌年に、以下のように書いているという。「クリッカーホイヤーや民家自体は興味深いが、その割に服装はつまらないものであるべきものがあまりない。そのような理由から、同じ県にある、素晴らしく装飾的で、変化に富んだ他の衣装に(我々は)注意を払うことにした。」Cf. Fejős, *op. cit.*, p. 200.
- (35) Fejős, Zoltán, *Tárgy-fordítások: néprajzi múzeumi tanulmányok* (Budapest: Gondolat, 2003), p. 123.
- (36) 吉見俊哉『博覧会の政治学』(東京中公新書、一九九二年)、一八頁。
- (37) 吉見俊哉、上掲書第五章、一七九—二七頁。とりわけ一九四頁の議論を参照せよ。
- (38) Bálint, *Az Ezeréves Kiállítás Architektúrája* (Bécs, Schroll Anna és Tsa., 1897), p. 37.
- (39) *Ibid.*
- (40) Cf. Jankó, *op. cit.*, p. 826.
- (41) Jankó, “Néprajz-Bevezetés”, *Magyarország közgazdasági és közművelődési állapota ezeréves fenállaskor és az 1896. évi ezredéves kiállítás eredménye* vol. V (Budapest: Pesti Könyvnyomda-Részvény-Társaság, 1898), edited by Sándor Matlekovits, p. 938-949.
- (42) Jankó, János, *A millenniumi falu* (Budapest: Néprajzi Múzeum, 1989), edited by Endre Szentkeő, p. 13.
- (43) Fejős, Zoltán, *Tárgy-fordítások: néprajzi múzeumi tanulmányok*, p. 72.
- (44) Fejős, *op. cit.*, p. 71.

- (45) Fejős, *A néprajzi múzeum gyűjteményei*, p. 829.
- (46) Fejős, *op. cit.*, p. 731.
- (47) “Voex et remerciements votés par le congrès”, *L’Anthropologie* (1900), p. 603. See also Jankó, “Jelentés a Párisban tartott nemzetközi kongresszusokról”, *Néprajzi értesítő* (1901), p. 59.
- (48) Fejős, *op. cit.*, p. 829.
- (49) Sebő, *op. cit.*, pp. 197-198.
- (50) Sebő, *op. cit.*, p. 197.
- (51) Sebő, *op. cit.*, p. 228.
- (52) Sebő, *op. cit.*, p. 228.
- (53) *Ibid.*
- (54) Viskár, “Népballedaink összegyűjtéséről”, p. 443.
- (55) Viskár, *op. cit.*, p. 445.
- (56) Viskár, *op. cit.*, p. 445.
- (57) Viskár, *op. cit.*, p. 445.
- (58) Sebő, *op. cit.*, p. 228.
- (59) Sebő, *op. cit.*, p. 220.
- (60) Katz, Mark, *Capturing Sound: How Technology Has Changed Music* (Berkeley, Los Angeles, and London: University of California Press, 2004) pp. 14-18.
- (61) Sebő, *op. cit.*, p. 220.
- (62) Sebő, *op. cit.*, p. 21.
- (63) Sebő, *Viskár Béla Népzenei Gyűjteménye*, p. 225.
- (64) Sebő, *op. cit.*, p. 162.
- (65) ヘルリンの比較音楽学者ホルンボステルにあてた最初の手紙（一九二二年五月二二日付）において、バルトークはまさにそのことを話題にしている。ハンガリー民族誌博物館の依頼を受けた彼は、短い自己紹介の後、以下のように用件を切り出しているのだ。「聞くところでは、あなたの方のフォノグラム・アーカイヴではフォノグラフの録音から複製を作り、ほかの機関と録音を交換するのに使っている

といひます。我々の博物館「訳注: ハンガリー民族誌博物館」も他の幾つかの機関との間にぜひ同じような交換関係を持ちたいと考えています。ただ我々には、*ハンガリー*のようにしてそのような複製を作ることができるのか、またそうした手続きにどれくらいの費用がかかるのかが分かりません。ですのでこの件についてどうか私に「教示くださいませう、よろしくお願いいたします。」 Cf. Demény, János (ed.), *Bartók Béla Levelai* (Budapest: Zeneműkiadó, 1976), pp. 188-189.

- (66) Eöszse, László, *Kodály Zoltán életének krónikája* (Budapest: Editio Musica Budapest, 1977, 2nd edition, 2007).
- (67) *Bartók Béla Összegyűjtött Írásai/1* (Budapest: Zeneműkiadó, 1966), edited by András Szöllösy, p. 569.
- (68) *Bartók Béla Írásai/5* (Budapest: Editio Musica, 1990), edited by Dorrit Révész, p. 13.
- (69) *Bartók Béla Írásai/5*, pp. 85-105.
- (70) *Bartók Béla Írásai/5*, p. 12.
- (71) Sebő, Ferenc, *Népzenei Ötvenkönyv* (Budapest: Planetás, 1997), pp. 37-38.
- (72) *Bartók Béla Összegyűjtött Írásai/1* (Budapest: Zeneműkiadó, 1966), edited by András Szöllösy, p. 568.
- (73) このテーマに関しては、本稿の筆者には既に下記の論文がある。太田峰夫、「イデオロギーとしての「農民音楽」―バルトークの民謡研究と文化ナショナリズム」『美学藝術学研究』第二三五号（東京：東京大学美学芸術学研究室、二〇〇六年）、一一三四頁。

本研究成果は「財団法人 花王芸術・科学財団」の平成十九年度助成によるものである。



【図1 ハンガリー建国千周年博覧会(1896年)会場平面図】

In: Bálint, Zoltán, *Az Ezredéves Kiállítás Architektúrája* (Bécs, Schroll Antal és Tsa., 1897), p. 3.



【図2 ハンガリー建国千周年博覧会「民族誌村」(1896年)会場平面図】

In: Jankó, János, *A Milleniumi Falu* (facsimile) (Budapest: Néprajzi Múzeum, 1989),
edited by Endre Szemkeő, inside front cover.



【図3 マジヤル人民家の展示(同時代の画家によるスケッチ)】

In: Bálint, Zoltán, *Az Ezredéves Kiállítás Architektúrája* (Bécs, Schroll Antal és Tsa., 1897), p. 24.



【図4 ロマのテントの展示(写真)】

In: Laurencic, Gyula, *Az ezeréves Magyarország és a milleniumi kiállítás* (Budapest: Kunosy Vilmos és fia nyomdai műintézete, 1896), p. 24.